

二〇二五年度 阪大 第3問(文学部以外) [問題編]

「阪大古文のみかた」の回となりました。二〇二五年の阪大国語の第3問を取り上げてお話をしていきたいと思えます。今回の問題は本居宣長『玉勝間』についての問題です。さあ、1週間、しつかり問題を考えてみてください。なお、本原稿における解答や解説は、大阪大学が公表したのではなく、研伸館が独自で作成したものになります。

Ⅲ

次の文章は、本居宣長『玉勝間』の一節で、『伊勢物語』に、真名(漢字)のみで書かれた「真名本」というものがあることについて、それを、通常の「仮名本」(平仮名を主体として漢字も混じる表記で書かれている本)と比較して、その時代性などを考証している文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

伊勢物語に、真名本といふ本あり。

〈中略〉

「思へる」を「思恵流」、おもゑる「給へ」を「給江」、たまえまた「ここへ」「かしこへ」などの「へ」をもみな「江」えとかき、「身をも」「これをや」などの「を」を「をや」といふ辞を、「面」おもて「親」おやと書き、「忘」わすれを「者摺」はすれと書けるなど、これらの仮名は、今の世とても、歌よむほどのものなどは、をさをさ誤ることなきをだに、かく誤れるは、むげに物かくやうをもわかまへしらぬ、えせものしわざと見えて、真名はすべてとりがたきものなり。

〈以下略〉

問 傍線部について、

- (ア) 現代語訳しなさい。「かく」の指す内容は示さなくてよい。
- (イ) ここで「誤れる」と評されているものは、「仮名」のどのような誤りであるのか。「を」を「をや」といふ辞を、「面」おも「親」おやと書き、「忘」わすれを「者摺」はすれと書ける」を例として説明しなさい。

[解答欄] 縦一七・六センチ×横二・一センチ

【解答】

(ア) 今の時代といっても、歌を詠むほどの者などは、ほとんど間違っていないことをさえ、え、このように間違っているのは

(イ) 「をも」「をや」「の助詞の」「を」「に」、ア行の「お」を仮名に用いる「面」「親」という漢字を当て、「忘れ」の「わ」に、「は」を仮名に用いる「者」という漢字を当てるなどというア・ハ・ワ行の仮名遣いを理解していないという間違い

【解説】

傍線部分を現代語訳していく問題。

(ア)については、問題条件に『かく』の指す内容は示さなくてよい」とあるので、指示語の「かく」は「このように」などと訳す。現代語訳の問題については、古文単語、文法の意味を明確に現代語訳に反映するようにします。「世」は多義語であるが、問題の始めに「その時代性などを考証している文章である」とあるので「時代」と訳す。「をさをさ」は打消の語「なき」(形容詞「なし」の連体形)を伴っているので「ほとんど」「めったに」と訳す。「だに」は副助詞で類推や最小限の意味を持つが、ここでは類推「でさえ」と訳す。「誤れる」の「る」が完了・存続の助動詞「り」の連体形なので、ここでは存続だと理解し、「間違っている」と訳す。

(イ)については、問題文に「「仮名」のどのような誤りであるのか」とあるので、『をも』『をや』といふ辞を、『面』『親』と書き、『忘』を『者摺』と書けるを例として「の「仮名」部分に注目し、本文の『身をも』『これをや』などの『をも』『をや』といふ辞」という部分を考慮すると、助詞「を」を、「お」という仮名をふる「面」「親」とし、「忘」の「わ」を「は」と仮名をふる「者」としている。これらの共通点を考えると、この「仮名の誤り」はア・ハ・ワ行の理解が不足していることが原因だとわかる。単純に仮名の振り方を間違えているのではなく、二つの間違った例の共通点を考えて解答に示したい。